

(実践報告)

## フィールドワーク（社会参加）における学習成果と今後の課題

岩崎淳子<sup>1)</sup> 清水八恵子<sup>1)</sup>

### I. はじめに

文部科学省の教育基本法第7条において、「地域貢献を含む社会貢献」が大学の役割として位置づけられている。本学においても、朝日大学の建学の精神である「国際未来を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人間の知性に富む人間の育成」に基づき、看護学の専門知識、高度な医療技術、さらには高い倫理観と豊かな人間性と国際性を兼ね備え、社会に貢献できる看護師を育成することを目標に2022年度より必修科目としてフィールドワーク（社会参加）を開講している。

フィールドワークは、実践する過程において社会調査の基本やコミュニケーションについて学び、現場の調査を行う中で地域理解が進むこと、学習への関心意欲が高まることが示されている。また、学習効果として学生がグループワークにおいてテーマや調査手法を選択し調査を実践し、それらの結果をまとめ、報告する過程にて得られるとしている（水上、2023）。

学習目標達成に向けて今年度は、「ボランティア活動についての講義」の追加、「学生が主体となりテーマを決定する」、「フィールド調査をおこないボランティア活動を実践し報告を行う」といった一連の過程でフィールドワークを展開した。報告方法としては、自分の意見を否定されず、尊重されるという安全な場で、相手の意見を聞き、つながりを意識しながら自分の意見を伝えることができ、小グループで話し合いを続けることにより、参加者全員が話し合っているような効果が得られるワールドカフェスタイルを用いた。フィールドワークの授業で、学生の学びの成果を明らかにしフィールドワーク教育の有用性と課題について考察したため、ここに報告する。

### II. 科目の概要

#### <講義時期・単位数>

1年次前学期 必修 1単位 30時間 15回

#### <授業の概要・目的>

大学周辺の地域やそこに生活する様々な人々の生活に触れながら、自らも地域の一員として貢献できることを考え実践する。講義、グループワークに基づきフィールドワークおよびボランティア活動を行い、その結果の発表、討議により地域で生活するさまざまな人々や生活のあり様を理解し、地域社会の一員としての意識を育む。

学生自らもその一員である地域社会に触れることで、生活者としての人間理解を深める視点と地域社会の一員としての役割意識、地域貢献への意識を養うことが期待できる。

#### <到達目標>

- ・ボランティアの基礎知識やその社会的意義について理解できる。
- ・目的を理解し目的に沿ったテーマを選択することができる。
- ・計画および実践するために必要な情報収集することができる。
- ・社会参加につながる計画を立て実践することができる。
- ・テーマに沿った計画から実践までグループで討議・協力することができる。

---

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

- ・学びをまとめ発表することができる。
- ・地域社会の一員としての意識を高めることができる。

#### <課題>

テーマは、「大学のある瑞穂市民の生活を知らう！」とし、フィールドワークの場所については、①福祉施設、②高齢者施設、③瑞穂市の産業、④食料品など買い物ができる施設、⑤公園、⑥交通事情、⑦コミュニティー施設、⑧瑞穂市の公共施設の中から選択することとした。

#### <講義構成・指導>

8グループ編成とし、1グループの学生数は約12人から14人、教員は3、4名とした。

講義内容は、表1に示す。各グループにおいて、テーマを決定し、フィールド調査を行い、ボランティア活動につなげる。その成果をワールドカフェスタイルにて発表を行った。教員は学生の主体性を生かしながら計画どおり遂行できるよう指導を行った。

表1 講義内容

回	授業内容
1	全体オリエンテーション 朝日大学のボランティア活動についての講演
2	文献検索方法について
3	各グループでのオリエンテーション 授業の目的を理解し興味あるテーマを選択する。
4・5	グループで取り組むテーマについてディスカッションを深め情報収集を行う。
6・7	実践調査計画を立案する。
8	調査の実施を行う。(フィールドワーク)
9・10	調査内容をまとめボランティア計画を立案する。
11	調査結果をもとにボランティア活動を行う。
12・13	発表準備(発表原稿も含める)する。
14	発表 発表時間 10分
15	グループ発表のまとめ 30分 まとめの用紙提出

#### <発表方法>

各グループを2チームに分けホストとメンバーにさらに分ける。作成した資料を基に、ホストが他グループのメンバーへ約6分間プレゼン後にディスカッションを約4分行った。プレゼンを聞いたメンバーは質問や新たな発見・意見を付箋に記入し資料に貼りつけた。その後グループごとにディスカッションで得られた学びを共有する時間とした。

#### <倫理的配慮>

学生に対して口頭で説明した。また、不利益が生じないように成績発表後に、個人が特定されないよう配慮し学生の記入したまとめの分析を行った。

### Ⅲ. 結果と考察

最終講義(第15回)の時に学生が、記入したまとめの用紙をもとに学びと学生の課題について述べる。

#### 1. ワールドカフェでの学びと課題(表2)

地域のことを調べることで、地域で生活するさまざまな人々や生活や環境を知ることができたと考える。また、調べたことから調査を実施しボランティア活動を行ったことで、地域貢献への第一歩を踏み出すきっかけになったのではないかと考える。この講義により、地域社会への関心を高めることやボランティア活動の大切さを知ることができたといえる。

グループ活動においては、コミュニケーション能力を高めることや、学生間の交流を深めることにつながったと考える。河口（2007）、石川（2016）は、フィールドワークの実践において主体的に考えることができるようになったと述べている。また、沼畑（2018）は、コミュニケーション能力の向上、協働的に学ぶことの価値や地域の人とのつながりから社会に貢献する意義を理解し、課題探究への意欲を高める効果があると述べている。このことから本学においても、「積極的意見を言える力が身についた。」「地域に貢献できることを考え実践できた。」との学びから、「考える力」が身についたのではないかと推察する。

課題については、「根拠を明確にすること。」「事前調査の不足。」より、実践するにあたり、事前の準備や根拠を明確にしていくことの必要性についての気づきがあった。この気づきは今後の看護学を学ぶ上で必要となる課題を見出したことにつながったといえる。

表2 フィールドワークでの学びと課題

学び	瑞穂市について調べて初めて知ることができた。
	学生間の交流が深まった。
	ボランティア活動の大切さに気付いた。
	コミュニケーション能力を高めることができた。
	地域に貢献できることを考え実践できた。
	話し合いをして、考えを深めることができた。
	グループの協力が活発になった。
	積極的に意見を言える力が身についた。
課題	具体的に論理的に調べることが重要であることを学んだ。
	情報共有が大切である。
	積極的に意見を言いたい。
	事前調査の不足。
	他人任せになった。
	時間配分がうまくいかなかった。
根拠を明確にすること。	

## 2. ワールドカフェにおける学びと課題（表3）

ワールドカフェにおいては、発表し意見交換をする。また、違うグループでの学びを共有できたことにより、さまざまな活動を経験することにつながったと考える。石川（2016）も意見を人に伝えることは簡単なことではないが、それによって他者の視点に立って物事を考える力が身につけられ、発表内容だけでなく活動全体の客観的視点を獲得することができたことが学生にとって深い学びにつながったと考えられると述べている。

「いろいろなまとめ方、発表方法を知ることができた。」ことや、共同作業の難しさや、伝え方などの課題が明確になったことで、今後必要となるプレゼンテーションでのスキルアップにもつながるのではないかと考える。

表3 ワールドカフェにおける学びと課題

学び	他のグループ発表を聞くことで学びが深まる。
	いろいろなまとめ方、発表方法を知ることができた。
	今後への良い経験であり自己の成長につながる。
	疑問を持って話を聞くこと。
課題	自分たちが気づくことができなかつた点に気付くことができた。
	意見交換への積極的な参加。
	協力して一つのプレゼンテーションを作ることの難しさを感じた。
	筋道を立てて伝えること。

### 3. 感想と要望について (表4)

学生の感想より、満足度も高く、学生が主体的に授業へ参加し、積極的な意見交換ができたことや、「調べたことを瑞穂市民にも知ってもらいたい。」ことから地域社会への関心がうかがえる。このことから、今回のフィールドワークにおける講義目的は達成できたのではないかと考える。

入学間もない学生にとっての、フィールドワークは、仲間づくりの場でもあり、また共同作業の大変さ、発信する力と多岐にわたる学びができる科目であるともいえる。

課題としては、グループワークが多いこと、またワールドカフェスタイルの発表に対する客観性の他界評価方法を検討と合わせ今後の講義形式を検討する必要がある。

表4 感想と要望

感想	この調べたことを瑞穂市民にも知ってもらいたい。
	会話することの楽しさ知った。
	楽しかった。
	達成感を味わえた。
	ワールドカフェなどの交流する授業が楽しかった。
	緊張感が少なく発表できた。
要望	話しやすい雰囲気を作ることができ濃い話し合いができた。
	過去の資料を見る機会は欲しかった。
	時間が足りない。
	感想を交流する時間がもっと欲しかった。
	発表スライドの枚数を統一してほしい。

## IV. 引用・参考文献

- 石川菜央 (2016). 大学院におけるアクティブラーニングの実践と効果的な教育方法  
— 広島大学「たおやかプログラム」における講義「地域文化創生論」を事例に —. 広島大学総合博物館  
研究報告, 8, 1-15.
- 河口充勇 (2007). フィールドワークの教育効果. 同志社社会学研究, 11, 67-79.
- 水上象吾 (2023). 大学のフィールドワーク教育における実習内容と学習効果 — 学生のプレゼンテーション  
資料・レポート分析 —. 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集, 10, 71-86.
- 文部科学省 (2006). 教育基本法につて. 文部科学省ホームページ.  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/houan.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm) (2023年12月23日)
- 沼畑早苗 (2018). 探究的な学習におけるフィールドワークの効果: SGH 学校設定科目「グローバル地理」  
の取り組みから. 研究紀要お茶の水女子大学附属高等学校, 63, 3-22.